

専門家はいらぬか？

なかむら ゆずる
中村 讓 日教組・委員長

漫才師（古い！）芸人、ピン芸人がテレビを賑わせている。ギャグを一発当てればもうテレビの常連。グランプリや大賞を取れば、後はバラエティ・番組の司会者か回答者。芸人がタレントの登竜門になっている。しかし、登竜門は退場門にそのまま直結しているような昨今のテレビ風景である。センスのいい若手芸人の使い捨ては残念で悲しい。これでいいのか。チョットお洒落になれて、収入も増える。本人たちは満足だろう。そして、いつしか消えていく。業界とテレビ局が芸と芸人を育てようとしない。使い捨ての非正規雇用労働者。アメリカ型していく雇用社会。欧米か！

専門業界が専門家を育てようとしない。専門家が育つのに時間がかかる。教育界が教員（専門職）を育てようとしない。教育関連法が次々「改正」されていく。組合以外の教育界は沈黙したままだ。教員が非正規雇用労働者になって「教育の質」も「教員の質」も高まる？ 始めから非常勤講師として採用される「教員」が増えてきている。ある県では三分の一にもなるという。

10年で免許を更新する制度もできた。10年間の期限付き採用だ。採用されて10年後には30歳代。そろそろ家庭を築く年齢だ。そのときに雇用不安があってよいのか。その10年後は40歳代。転職も不利になる年代だ。生活を変えなければならぬかという怖れと不安をもって就職する。「任期付き」教職は若者たちが志望する魅力ある職業になるのか？「学力世界一」で有名になったフィンランドでは青年が一番なりたい職業である。社会的な地位も高い。女性の割合も高い。信頼を寄せる社会の眼差しがある。日本は志望者が年々低下し、若年退職者が増えてき

ている。不信を煽る輩がいる。

「能力・実績」評価が喧伝されている。「経験」は「年功序列」として排除される。経験主義を賛美するわけでは決してない。しかし、経験を軽んじていいのか。教育は人間と人間のやりとりだ。経験と知識は一体のものと思う。経験の比重を軽くみるべきではない。正当に評価の対象とすべきだ。

教育現場に民間校長、社会人教員を登用する施策が進む。経営者としては優秀なのだろう。銀行マンとしては優秀だったのだろう。しかし、教育者としてはどうか。経験1年目である。簡単には評価できないはずである。教員になろうという志をもって教員免許を取り、就職する「普通のコース」をとる若者は質が低いのか。教員は社会人ではないのか。税金も払うし、選挙にも行く。地域活動にも参加する。社会人教員という造語は矛盾だらけだ。

だからか、教育改革に専門家は要らないと再生会議をスタートさせたアベという人。選ばれた教育再生会議の委員の面々。自分の「思い」だけ語って、役割を終えた。専門家じゃないから消えていった。教育現場の共感も得られなかった。

オルテガ（スペインの社会学者）が『大衆の反逆』で専門主義に陥り総合的な解釈をしない科学者や知識人を無責任な大衆人と批判したのは80年前。知識の総合化と外部発信を怠ってきた専門家を批判した。専門家自身の自己検証は必要だ。自己検証をした上で閉じこもるのではなく、社会と繋がっている必要がある。社会に発信する自覚も求められる。社会は専門家の開かれたネットワークであって欲しい。そこに職業の優劣や社会的価値の高低があってはならない。